

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

かみなが姫

佐藤家の昔話（十二）

編 武 田 正

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

かみが姫

佐藤家の昔話(十二)

編 武 田 正

かみなが姫

佐藤家の昔話(十二)

- | | | | | | | | | | | | | | |
|------|----|------|-------|-------|----|-------|---------|------|---------|---------|---------|-----|-----|
| 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 猫なで声 | 松茸 | 面白い話 | 馬が豚の子 | かみなが姫 | 雪女 | 鬼人のお松 | 「新巻」の由来 | 絵姿女房 | 夢見の又右衛門 | 七夕さま(2) | 七夕さま(1) | 平将門 | 俵藤太 |

36 34 32 30 27 26 25 24 21 18 13 9 7 5

21	20	19	18	17	16	15
又右衛門の天昇り	五反田の由来	四十八枚の田	小僧持念 貸し便所	人参・牛蒡・大根	河童と角力とり	河童の手紙
48	47	46	43	42	40	38

昔話における「語り」の系譜 瞽女・祭文・僧侶	武田 正
51	

凡例

佐藤孝一氏が自らテープに吹き込んだものを、そのままを翻字したものです。

1 俵 藤 太

499

むかしむかし、熱田橋の下に住む竜神は、夜毎に現われる三上山のむかでに悩まさつてだ。

ほこで、誰かに退治してもらうかと思つて、身の丈^{たけ}二十丈あまりの大蛇に化けて、橋の上さ横たわつていた。ほして荒^{あら}いような強そうな武士を探していた。ちようどほこさ通りかかったのが、藤原藤太秀郷だった。普通の人なら、ほの蛇を見ただけで、ぶつ魂消て氣絶してしまふ。しかし秀郷は天下一の豪雄であつたものだから、ゆうゆうと蛇の背中を踏んづけて行つた。ほして橋渡つて行つた。竜神はその豪胆さを見込んで、百足^{むかで}退治を頼んだ。

秀郷は「嫌^やんだ」て言^やねですぐ引受けた。竜神と共に水の中へ入り、竜宮へ向つた。そこは石だたみさ、瑠璃を敷きつめ、欄干や柱には金銀をあしらつた莊麗な宮殿であつた。若い美女が現われ、ほして酒宴が開がつた。しかし夜が更けて来ると、周囲の者たちはみな恐れおののき、隠れてしまつた。秀郷は一人、愛用の、

五人張りの弓を、三本の矢とをもつて怪物が出て来るのを待った。

いよいよ、怪物が出てくるという時、竜神さま、石焼いて周囲さ撒らまいてちらがしった。ところが、ほの石で足火傷したり、何かえして、なかなか来らんねので、二日三日来ねがつたげんども、来るようになった。ほして来るど雷鳴とどろがして、ほして、ざばざば、ざばざばと音させて、松明二、三千本ほど二列に燃やしたような明るさぐらいだった。ほして三上山から竜宮めざして出はつてきた。

「ござんなれ」

と、秀郷は第一の矢をつがえて、うんうんと光る目の間をねらつて射った。ひようと射たれば、ところが鋼さでも射^ふつたように、はねかえされた。すかさず第二矢をつがえて射ったが、同じであつた。残る矢は一本だけだ。唾^{つばき}に弱いていう眉間をねらえええ。

最後の矢の先さ、唾つけて、やはり眉間のどこねらつて、ひようと放てば、してやったり、矢は尾っぽのあたりまで深々と突き通り、さすがの怪物も土ひびき

立てて、大山鳴動して、ほこき倒れてしまった。ほして竜神さま喜んで、秀郷さ、矢の当たらないカブトと、ほれから、なんぼ食つても食つても食つてもならないという俵をくれた。

「その代り、その俵を、決して底叩くでないぞ。底叩くと米なくなる」
という俵呉^けだ。

それから、誰いうとなく、藤原藤太秀郷でなく、「俵藤太秀郷」ていうようになつたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

2 平 将 門

500

むかしむかし、平将門ていう人いたけど。ほの平将門ていう人は非常に戦さ上手であつて、自分自らも不死身であるということを豪語していた。

ところが、藤原藤太秀郷が、

「不死身であっても、どこかに欠点があるのではないか。どこか弱点があるに相違ない」

というわけで、自分おかかえの針師（針灸）の「キキョウ」という人に命じてその針を打って来いというわけで、密命をうけて、ほのキキョウが将門の屋形に入ってたわけだ。どこにハリ打っても痛いて、一つ言わなかった。

ところが、コメカミに針刺したら、「痛い、痛い」というた。

「ははあ、弱点ていうのはコメカミだ、コメカミにあるんだ」

ということ悟って、そして帰って来て、藤原藤太秀郷どさ報告するわけだ。

ほして、戦さで、コメカミを射抜かれて将門が藤原藤太秀郷に打ちとられたわけだ。

んだから、平将門のお墓周辺には、キキョウのためにやらっだからというわけで、キキョウていうのは植えておかねんだ。どんぴんからりん、すっからりん。

3 七夕さま(1)

501

むかしむかし、七夕さまでいうことについて、こんな話ある。

牛飼居だった。ほの牛飼いが非常に牛ばめんごがって手入れした。よく扱った。ところがほの牛が、あるとき口立いつかった。

「旦那さま、旦那さま、いつの何日、天から七人の織姫が水浴びにくる。川原さし水浴びに来つから、ほのうちの一番若い織姫さまが、これは機織りも一番上手だし、器量も一番ええ。その人が丁度、あそこの一本松の枯枝さ羽衣をかけて水泳ぎすつから、ほん時、その羽衣を持つてござっしやい」

て教えた。果せるかな、その日になったら、天からすいすい、すいすいと七人の天女が降りてきて、水浴びはじめた。それはすばらしい放香すると思つたら、それは肌合いの匂いだった。ほしてほこさ牛飼いの人が出て行つたらば、人間の気配に気付いて、ほして六人の織姫が、すいすい、すいすい、天さ羽衣着て登つて行つてしまった。

ところがほんどき、牛に教えらっでだ一番若い、松の木の枝さ羽衣かけたのを牛飼いは持つて来てしまった。で、何とも飛んで天さ行かんねもんだから、追っかけで来たわけだ。ほして二人は夫婦になつて、子ども二人生まつでしまった。ところが何日経つても、一番末っ子の七夕さまが帰つて来ない。お母さんの天帝さまという人が、家来に命じて探させた。ところが水浴びに行つて、世俗の人と一緒になつた。それを烈火のごとく怒つた天帝さまは、

「すぐさま、連れて来い」

て、家来さ命じて、連れに寄こした。そして、いやおうなしに、子ども二人いだから無理矢理天さ連れて行がった。

ところが、牛飼いが、

「いや、子ども二人もいてから、天さつれて行がっだなて、とんでもない。困つたこと始まつたもんだ」

て、そうしていたところが、牛がまた口立つた。

「旦那さま、旦那さま、おれも今までのいろいろ扱わつて来たげんども、寄る年波

でもう余命いくばくだ。おれが死んだら、おれの毛皮を着て、天に飛んで行きなさい。そうすると、奥さんの七夕さまさ会われっから」

て、ほういうわけで教えだ。ほうしたら、まもなくその牛がころっと逝くなつた。

「許せよ」

ていうわけで、ほの皮剥いで、ほして牛の皮ちよつと着てみたら、ふわふわて浮く。

「いや、こりや大したもんだ」

そして、天秤びんにして、前にはお兄さん、うしろには妹をかついで、ほして天に行くべと思つたら、バランスがとんね。兄さんの方が重たいもんだから下がる。

「ははあ、それでは」

というわけで、傍にあつた手桶と柄杓とを妹の方に結付けて、そして平均とつてふわりふわりと天さ浮いで行つたわけだ。そしたら、天と地の境に「天の川」という川があつた。天は飛ぶことが出来つけんども、川の上、牛皮と川が差し合

いだというわけで、川は何としても越せぬ。

「ほんでは仕方ない。ここ、まず川渡って行かんね」

というわけで、牛の皮をぬいで、二人の子どもをつれて川渡つど思つたれば、

「小癪な、下郎め」

というわけで、天帝さま、ごしやえつただけあ、銀のカンザシを頭からいきなり抜いて、天の川さ一線を画したわけだ。ところが今まで漣波一つ立たねがったその天の川、急にむつくりむつくりと水が増ふえて大増水、大濁流になつてしまった。

「んだげんども、ここまで来て、会わねでもどるわけ行かねし、よし、仕方ない」
というわけで、その親子三人して、柄杓とその手桶で水をかきはじめたど。必死になつて。命もつきよとばかりかいたれば、考えてみたれば、天帝さまが、

「子どもには罪はない。子どもは自分の孫にあたる」

て、やむをえず、かささぎをいっぱい呼んで、かささぎで橋をかけて、そのかささぎの橋の上で七夕さまと牛飼いが年一回ずつ、そこで会うことを許さつた。

それが七月七日の牛飼いと織姫さまとが年に一回お会いになる日なんだど。どん

ぴんからりん、すっからりん。

4 七夕さま(2)

502

むかしとんあつたけずま。

あるところに、牛飼いがいて、せつせ、せつせと牛のめんどろ見っだ。

して、ある日、浜辺さ行ったら、どっからともなく、きれいな匂いがしてくる。

「ははあ、不思議な香りもあるもんだ」

て思つて、鼻ひくひくさせて、そして匂いのする方見たら、これは何と、お伽

の国さでも行つたような、きれいな娘が、水浴びしておつた。

「ははあ、天女ていうのはこのことだべな」

て思つた。んだげんども、天女見たなていうても証拠がなければ、誰も本気しねだろうと、そこらに、ここらに何かないもんだべかと思つてみれば、ちよう

どそこの松の木さ着物みたいな引かかっていた。

「これは地上のものではない」

というわけで、これを持って帰ってきた。そしたら、

「何とか返してください」

というわけで、追っかけてくる。そして家まで追っかけてきて、何時とはなしに、二人は夫婦になって、子どもまで出来てしまった。

ところが、その羽衣、うちのタンスの奥深く仕舞ったげんども、虫え食^かつたりすつど何とも仕様ないと、ある時虫干しして、牛飼いが野良に出て行ったわけだ。

ところが、今まで天さ帰るなて一言もいわなかったげんども、その羽衣みたらば、むらむらと里心が出て、そして天女がそれを着ったけあ、すいすい、すいすいと天さ昇って行ってしまった。

帰って来たれば羽衣がない。奥さんはいね。いや困ったこと始まったというわけで、なぜしたらええがんばていうわけで、占師さ行つて聞いてみたらば、

「竹を植えて、その筍さ千足のワラジを肥料（こやし）しなさい。そうすると天ま

でとどく」

ということ教えらった。そうかということで、次の日から藁を集めて、藁ぶつてワラジ作り始めた。九百九十足のワラジを作ったげんども、後はワラもなくなる。何してとても千足はコヤシ出来なかった。んだげんども、

「仕方ない。あられだけ肥料すんべ」

ていうわけで、九百九十足のワラジを肥料した。ところが筍するする、するする、天まで伸びるということがあるんだが、下から見れば、あわや雲まで届いたような気がした。ほして、枝さ手かけて、ワッショワッショ、ワッショ昇って行ってみたれば、やっぱり、ほの、九百九十足だから、後の足りない分だけ、筍が短かった。ところが上に奥さんがいて、手招きした。んで、その天の神さま、「地上さ行つて、大変、七夕がお世話になったそうだから」

ていうわけで、雲、すうつと下げてよこして、そこさワッショ昇って行つた。ほして行ったら、何だか倉みたいなあつて、そしてそこで、いろいろ御馳走になった。そして聞いた。

「天にも水田ていうのあるんだか」

「なして」

て、七夕さま聞いた。

「いや、この御馳走は、これは田螺でないか」
て聞いた。

「いやいや、これは田螺でない」

「ほんでは、何だ」

「これはオヘソだ。オヘソを食べることによつて浮力がついて、地上さ降つて行かねで、天さいることができるんだ。オヘソ食べねど重たくなつて、雷さまなんか、ちよいちよいヘソ取らねで、ヘソ食べねで、地上さ落つて行くことある」
こういうこと言^やつた。

「ああ、ほうか」

て。そして天さ行つて、毎日ただでもいらんねから、いろいろ手伝つた。

「今日は種まいてこい」

ほして、何千粒ていうのを蒔いて来いて言っで、最初豆蒔き
終ったれば、

「畑さ蒔けて言うたんではなかつた。田さ蒔けて言うたんだ」

て、そのいじわるお父さんに言わつた。ほうしたれば七夕さまは、「ほんでは」
というわけで、鳩さ命じて全部畑の豆ば田さ運ばせた。んで、まずそこは合格し
た。

「んでは、明日、お前、瓜の番しろ」

熟瓜うみの番させらつた。ところが、

「その熟瓜、食ってなんねえぞ」

ていわつた。「はい」何とも何とも喉乾いてきて、喉と喉くつついてしまうよう
で、何とも仕様なくて、ほの瓜に嚙りついたところが、そこから水出て、ごーと
流されかけた。ほしてはあ、どこまでも流されつかと思つたれば、やっぱり鳩が
来て、牛飼いば助けて呉だ。ほして、

「食うなていうのを、お前食つたがら、一緒にさせるわけには行かぬ」

年に一回だけ会うこと許さつて、七月七日、天の川をはさんで会うこと許さつただけだ。どんぴんからりん、すっからりん。

5 夢見の又右衛門

503

むかしとんとんあつたずま。

ある村に三本橋というところあつた。ほしてその村に又右エ門という人がいて、夜寝つたれば、お観音さま現わつて来て、

「これ、又右エ門、又右エ門、お前は正直で一生けんめい稼ぐええ若衆だ。んだげんど、なかなか貧乏してるげんども、おれの言うこと聞け。たちまち金持になつから。ほしたら、決して金ていうものは悪い方さ使わねで、ええ方さ使わんなねぞ」

て言うたけあ、すうつとかき消すごとく無くなって、目覺した。

「はあ、お観音さま、おれの言うこと聞け、お観音さまの言うことには、三本橋の上さ、三日間立ってろて言うたはずだ。なるほど」

て言うわけで、次の日からいきなり行つて、毎日三本橋の上さ立つてだ。一日立つてだ。何ごともない。

二日目、これも朝げ早くから日中の暑いとき、あるいは夕方の日暮しの鳴く頃まで、西山さ日がとっぷり没する頃になつても何もない。

いよいよ三日目、ほして、朝げ早くから、夕方おそくまで橋の上さ立つていた。ところが、豆腐屋出はつて来て、

「おい、何、毎日ほだえして立つていんなだ」

「いや、こういうわけで、夢枕に立つて、して、おれのいうことを聞くど、必ず金持にしてくれつから、て言つだもんだから、おれもお観音さま信心だし、こさ立つてたわけだ」

というた。

「いやいや、当てなんね。そういうことは、俺もな、つい先だつて、こういう夢

見た。ある部落の尻の方に白椿ある。その白椿の根っこ掘つど、大判小判がざくざく出るからという夢見だった。おれはたわえない夢だと思つて、掘りもしねがつたげんども、夢なんていうものは当てなんねもんだ。掘つてみれば、瓦や瀬戸かけに決っているつだな。ほだな、金銀、誰も土の中さ埋けておぐ人いねつだな」
て、いうて行つた。

「はあ、それだ」

というわけで、その又右エ門がいきなり、こんど家さ来て、唐鍬だ。両ツルだて、掘るもの持つて行つて掘つてみれば、果せるかな、そこに金銀、大判小判財宝が埋まつておつた。して、金持になつて、道普請だの、橋普請だのて、みんなのために使つて、私すねで、みんなのために使つたので、みんな、

「三本橋のお大人、三本橋のお大人」

ていうようになつたけど。どんびんからりん、すつからりん。

6 絵姿女房

504

むかしむかし、あるところに、とても働く若者がいて、その若者がきれいな奥さんもらつたど。ほしてまた、仲良くて片時も離しておかんねど。

んだげんども、炊事仕事、洗濯、何かえさんなね、ほういうとき野良さ出はつて行がねわけもいかねし、ほんどき、なぜすんべと思つたら、ほの、片時も忘れらんねもんだから、絵描きに、きれいな奥さんの絵描いてもらつて、ほして、絵とともに田んぼ、畑さ行つて稼いだ。ほして絵ばちゃんと木さ貼りつけておくとか何かしていたところが、風吹いてきて、その絵が飛ばさつてしまった。

ほして、どんどん、どんどん飛んで行つて、どこさ行つたと思つたら、ほのお城の中さ飛んで行つてしまつて、殿さまの目さ止まつてしまった。ほうしたら、殿さま、

「うん、これはすばらしい女だ。おなこ こういう女、おれの側女にあげろ」

ていうわけで、草の根分けても探がせていうわけで、探してみたところが、

その人の奥さんだったって。ほして否応なしに、城中に連れて行ったわけだど。

連れて行かれっどきに、その奥さんが言うたど。

「三年たったら、桃売りござっしやい」

ほして、桃の木植えて、三年経つたれば実^なったもんだから、その桃背負って、お城さ売りに行った。ところが、いままでブスツとしていたほの奥方が、桃売り行つたれば、笑った。ほうしたればその殿さま、

「奥が笑った」

というわけで、非常に喜んだ。

「何、ほだえ面白い」

というたらば、

「ほの桃売りぐらい面白いな、ない」

というたど。

「んだら、おれ、ちよえつと桃売りになつてみつかなあ」

というわけで、こんどあ、その桃売りとお殿さま、取換えっこしたど。ほして

お城さ、百姓が殿さまになってしまったわけだ。殿さまは桃売りになってしまったわけだ。

桃売り面白いと思ったら、地方さ行ったら、何と、桃など売れるもんでない。面白いどころか、ほうほうの態ではあ、

「こだごとしていらんね。早く城中さ帰らんね」
ていうて、帰んべと思つたれば、

「何だ、お前。どこの者だ」

「おれは殿さまだ」

「殿さまなど、ちゃんと城中にいる。変なこと言うな」
ていうわけで、さんざん、そこで怒らうでしまつて、ほして城中さ帰らんねぐなつてしまった。して、こんど、ほの百姓がゆうゆうと殿さまになって、そのきれいな奥さんと、城中で暮したけど。どんぴんからりん、すつからりん。

7 「新巻」の由来

505

むかしとんとんあつたずま。

今でも「新巻」ていうもの、正月あたり、お歳暮になんか、あるいは御年始なんか、贈りものする。

かいつはというわけだかていうど、いわゆる「鮭」ていう魚は、川さきて子産^なす。そしてその生れた子は、またそこにのぼってくる。変らぬ交際をお願いしますというわけで、その鮭が海さ行つて、また次の年、毎年毎年、いつも同じ川に、相も変らず卵なす。そういうどっから、

「相も変りませず、御交際をお願いします」

ということで、鮭[・]のよを贈[・]んのだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

8 鬼人のお松

506

むかしあつたけど。

山の中ほどに、「石の洞」といわれるところがあつて、大きな一枚岩が地面から斜めに突き出はつて、天然の洞窟となつていつどこがあつた。むかし、ほの石の洞を住みかに、恋に破れた、ほして世の男性をのろつて、若くして美しい、とても魅力のある女がいて、旅人が来つど、

「どうか向う岸さ渡してけらつしやい。おれば負^{うぶ}つて渡してけらつしやい」

ちよえつと、ほの旅人が顔見つど、笑い顔なの、とても、ぞつとするほどきれない娘だった。二つ返事で、ほしてほいつば負^ぶつてその川を越すべと思うど、溪流の中ほどまで行くと、懷からアイクチを出して、旅人の肩から心の臓にいたるまで、一気に突刺して、ほして懷中のものを奪つた。人々は、かいつば、恐れて、鬼人のお松と呼んでいだつけど。どんぴんからりん、すつからりん。

9 雪 女

507

むかしむかし、東北には、この雪女というのがいたつたど。

ある吹雪の日なの、旅人が通つていつど、おぼこ抱いてきて、

「どうか、このおぼこ、ちよえつと抱いてでけらつしやい、用達して来つから」

普通の人だら、「んだか」なて、ほのおぼこ抱いだんだら最後、困つたもんだ。

たちまち重たくはなる、寒くはなる。冷たくはなる。んだげんども、はいつ絶対はいつ、電気さでも引掛つたように離さんねんだど。ほして命とらつた。どこそこさ、また雪女出はつたて、人々から大変恐れらつた。

あるところでの、

「向う岸さ渡つだいんだげんど、どうか向う岸さ渡してけらつしやい」

て、ワラジ履きだつた親切な人は、ほれ、「んだか」というわけで、その女ば背負つて、向う岸さ渡んべと思うと、川の真中で冷たくなつて、ほしてはあ足動かねぐなつてしまつた。そして川の中で往生してしまつたということ、たびたびあつ

た。

んだから、東北の方では、雪女ていうの、非常に恐れらっただもんだど。どんぴんからりん、すっからりん。

10 かみなが姫

508

むかしむかし、あるところに、とっても働き者の若夫婦いだっけど。ほして、とうちゃん山で炭焼き、かあちゃんは機織りして暮していたど。

ところがその二人の間には子ども居ねがった。ほしてお観音さまさ、

「何とか一つ、子どもを授けてけらっしゃい。子どもを授けてけらっしゃい」

て、お詣りした。ところが念願かなって、子ども授がった。授がったげんども

その子ども、頭髮の毛一本もない。女の子ども授がって、頭坊主なもんだから、

「いや、困ったもんだ」

て、毎日、何とか髪生えるようにて、お願いしつたげんども、髪生えね。不思議なこともあるもんだ。

たまたま南の方の山光る。おかしいこともあるもんだて、山のかげは輝いて光る。何かがあるに相違ない。行ってみつかというわけで、二人で行ってみれば、ほのお観音さまがクモにいじめらつていた。

「これは大変だ」

というわけで、とうちゃんが木挽きなもんだから、山刀、まさかり斧、たが鋸持つて行つてクモさ立ち向つた。ほして、お観音さまを助けようとした。

ところが、そのクモもさるもの、激闘の末、とうちゃんが、とうとうそのクモにやつつけらつてしまたけどはあ。はいつ見っただかあちゃんは、とうちゃんば殺していらんねというわけで、お観音さま助けらんねもんだから、かあちゃんが向つて行つたら、何百本という糸をクモは投げてよこす。

ところが、かあちゃんは機織りの名人だもんだから、ほの糸を簡単にさばいで、糸をそつちやさばき、こつちやさばき向つて行つた。ほうしてとうとう、おかちや

んがクモを短刀で突き殺した。んだげんども、クモの毒廻って、かあちゃんもそこでとうとう、二人とも死んでしまったけど、んだげんども、お観音さまが助かったもんだから、お観音さまが、その娘さ、髪授けた。

次の日から、たけなし黒髪でフサフサとした髪がその娘さ出た。

ところが、ある日、雀が城中で、門前さ巢作った。はいつ分ったのが、つくづく見っだら、さらっと下がってきた髪の毛みたいがある。

「おかしいもんだなあ」

と、思って、はいつ取ってみれば、すばらしい、たけなし黒髪の真直な髪だった。ほの髪の持ち主だら、さぞかし美人だべというわけで、草の根分けでも探して参れていうわけで、方々探したげんで見つからぬ。ところが山沢の田舎の方まで探したら、とうとう娘見つかった。んで、誰言うもなく「かみなが娘、かみなが娘」と言っやていだったはあて。

たけなし黒髪、毎日クシですいて、そして髪結っていつどこなの、にこつと笑ったどこなの、ものすごい美人だった。ほしていつか殿さまに見出さつて、お観音

さまのおかげで、めでたく殿さまの奥方になったけど。どんぴんからりん、すつからりん。

11 馬が豚の子

507

むかしむかし、江戸で、ある日ある人が、ほれ、

「いやあ、大したもんだ。馬が豚の子を産んだ」
ていうた。

ところが物見高いは江戸の常で、吾も見んなね、俺も見んなね、ほら髪結いは
剃刀ぶん投げて走る、ほれ。魚屋はボデ投げて、ほりや、何もかにも、役人まで
がわんさわんさ。

「何のさわぎだ」

方々そつちで怪我人、こつちで怪我人が出る仕末だ。ほして人かきわけ、かき
わけ行ったらば、小っちゃな豚の子が一匹死んでいたつけど。ところが、

「何だ、このさわぎは」

ていうわけで奉行所で吟味したところが、馬か豚の子生んだていうた人がいたという話。

「こりやとんでもない話だ。取りおさえろ」

ていうわけで、誰いうたべ。彼いうたべて論議したれば、ある人がとうとう取り押えらつた。ほうして、番屋さ引張らつて、取調べうけた。

「これこれ、その方は、馬が豚の子生んだていうたほでに、そういう嘘ついたていうたほでに、あれほど人が集まつて、怪我人が出る仕末だった。そういう風な言動はつつしまれ」

て、ごしやかっだ。

「いや、お役人さま、おれは決して、馬が豚の子生んだて言ね^や」

「言ね^やざああんまいな、みな、ほういう風に聞いた」

「いやいや言ね^やんだ」

「何ていうた」

「馬が豚の子踏んだていうた」

「うん、何、そういうことありがちだ」

ていうて、無罪放免だったって。どんぴんからりん、すっからりん。

12 面白い話 おもしや

510

むかしむかし、とっても話の好きな殿さま이었다。

ところが、その殿さまもいろいろ行政面が思うように行かぬ。雨降って増水して、ほつつ流さった、ほら、風でどっちが飛ばさったていうて、その年は仲々災害の多い年で、むつつりして笑わねくなった。

三太夫だ、家老だ心配して、

「誰か、面白い話語る人いねがな、面白い話語った者には、相当の褒美とらす」
こういう触れを出した。ところがあるとき、若者が、

「んでは、面白い話、おれがする」

「間違いないか」

「間違いない。絶対間違いない面白い話だ」

「ほう、それでは城中に行って話してみろ」

というわけで、呼ばて行った。ほして殿さまの前さ行って、

「あるところに、真白い犬がいた。頭も真白、……」

「うん」

「耳も真白、鼻も真白、口も真白、背中も真白」

殿さま、体のり出した。

「背中も真白か」

「背中も真白、腹も真白、手足も真白だ」

「手足も……うむ」

最後に、

「うん、尾も白いか、アハハハ……」

て笑った。

「んで、これで面白い話、おわりです」

「うん、なるほど尾も白い話だ」

ていうわけで、殿さま大笑いした。ほしてすばらしく御褒美もらったけど。どんぴんからりん、すっからりん。

13 松 茸

511

むかし、あるどこで、子どもが出ぬくて子どもが出ぬくていだった。ほして神さまさいろいろ願かけた。ほうしたら、その奥さんが腹大きくなった。ところが奥さんが五十才、旦那さんが五十三才だった。

「いやいや、こりやとんでもない、遅く子宝授かったもんだ」
とつきとうか
て、いだ。ほして十月十日の月満ちてきたげんど、生まんね。二十か月、まる

三年もかかってしまった。

「なんだ、こりや生まれんなだべか」

というたれば、三年経って生まつた。ほして、

「何て名付けんべ」

ていだ。

「五十三で入ったんだから、まず五^ご三^{さん}とでも名付んべはあ」

「五三なあ、んだて、間違いで生まつたんだ。間違いで生まつた子だから、五三（誤差）でええがんべなあ」

て、「五三^{ごさん}」で名付けた。ところがほの五三^{ごさん}どのあ、三年も腹の中さ入つてだもんだから、すぐ口立った。ほして、ある人あ聞いてみた。

「五三殿、五三殿、腹中の気候ざあ何たもんだえ、お前、三年も居で」
ていうたれば、

「ああ、一年で一番ええ気候なもんだ」

「一年で一番ええ気候だていうの、何月頃だった」

「ちょうど九月の末か十月の初め頃だった」

「なして、ほだごどわかる」

「んだて、ちよいちよい松茸あ出っけも」

どんぴんからりん、すっからりん。

14 猫なで声

むかしむかし、このねずみの見合いがあつた。

片脇は村長さんの息子さん、片脇は名主さんの娘さん。ほして、まず、村長さんの方の息子ねずみは、色気もええ、目はくりくりとして、ヒゲよし色よし、毛色よしで、まず欠点、非の打ちどころなかった。

ほしてまた、名主さんの方の娘も界隈のねずみ美女であつた。ほの二人の見合いなていうの、みんな、ほの、

「いやあ、あれだらお似合いだ」

ていうてだ。ほして、見合いも無事終つて、おかあさんねずみが、娘ねずみさ聞いてみた。

「あだえ、ええ人いねっだべな」て。

「おれ、おかちゃん、気に合わねどこある」
ていうたつて。

「どこ気に合わねどこ。あだえ（あんなに）ええ息子、ほだえ居ねべな」
ていうた。

「んだて、おれあ大嫌いだ。一番きらいなどこある」

「ほだえ嫌いだなて、どこ気に合わねよ」
ていうたら、

「お前、おれとこれから交際してみねがあ、なて言うの、ちようど猫なで声だつた」

ていうたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

15 河童の手紙

513

むかしむかし、ある人が手紙頼まつた。ほの手紙は宛先もなければ、送り主の名前もなければ、不思議なこともあるもんだと思つて、

「へえ、そんなこともあるもんだ。ほんでは誰さやか分んねつだな。どこそこまで行ったら渡して呉るなて言っだげんども、その人、果して来ねもんだかわからね」

で。その人はふつと考えた。

「はあ、いま巷ではびごつてる河童の仕業だな。河童ならば、これ水さ濡らしてみつど分かるんねべか」

て、はいつ、ほの手紙、水さ濡してみたれば、現わつた。

「とてもうまそうなのを、お前にまがせつから、自由にこの者を楽しんで、ほれから食べてくれ」

という文面だった。

「なんだこの畜生、おればなぶり者にして殺して、ほの他、食ってけろていう手紙だったのか、もつての他だ。よーし」

というわけで、こんどその人が手紙書き換えた。

「この者は正直で、とても働き者だから、金子など、宝などくれてやるがよい」
て、書いて、ほして知^しやねふりして行つて、ほの手紙持つて、ある沼んどこまで行つたれば、待つていだつけはあて。

ほしてその、待つてたどこさ行つて手紙渡した。ほうしたけあ、手紙見ただけあ、何だかいぶかしいような顔して首ひねり、首ひねりしたけあ、沼さずいっと入つていったけあ、風呂敷包みみたいなもの、どさつとぶん投げて、また沼の中さ入つて行つてしまった。何だべと思つて風呂敷包みあけてみたれば、はいつあ金銀財宝だったて。はいつ、ぐらり背負つてきてはあ、家さ来て、ほしてすばらしく金持になつたけど。はいつは河童ば欺したはなし。どんぴんからりん、すつからりん。

16 河童と角力とり

514

むかしむかし、ある人が馬引張って行つたれば、河童が出はつて来て、
「どうだ、おれと角力とつか、んねごんだらば、この馬、おれは引き込むぞ」
ていうた。

「いや、今日は是非ともいそがしい用あつからて、間違ひなくお前と角力とりすつ
から、ほんどきまで待つてけろ。何とか一つ頼む」

て、こういう風に言うた。ほしたれば、

「うん、何時の何日だぞ。確かに間違ひないか」

「はい、間違ひない」

いや、ほこの河童の角力のつよいことつたら、誰だてかなわね。ほしてさんざ
ん角力とつて負けつど、ずすりずすりて沼さ引ずつて行つて、ほしてほこではあ、
河童の食べものになつてしまふ。ほして、ある人が見込つてしまった。

「いやいや、こりや困つたごんだ。おれも河童から挑戦うけて、河童と角力とり

すんなね。河童、強いて聞いでも、何ぜしたらええかわかんね。約束してしまつたすはあ、こりや、なぜしたらええがんべ」

というわけで、ほして占い師さ行つたらば、占い師は、

「いや、ええこと教える。お仏さまさ御飯おま上げるお仏器で、御飯食つて行げ。んだど河童に負けねどしたもんだ」

「はあ」というわけで、こんどお仏器さ御飯、お仏さまさ上げて、お詣りして、ほしてそのお仏器の御飯食べて行つた。ほうして沼のどこまで行つたらば、河童出はつてきた。

「さあ、河童どの、角力とんべ」

ていうたれば、

「いやいや、いや。まつぼくて(まぶしくて)駄目だ。光つてだめだ。まつぼくてだめだ」

て、河童はともかかつて来らんねがつたつて。ほのお仏器の御飯食べて行つたもんだから、お仏さまの光さしてはあ、なえつたて河童はかからんねくて、逃

げてしまったて。んだから河童に見込んだり、河童いだときには、お仏器の御飯食べて行けていうた時代あったもんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

17 人參・牛蒡・大根

515

むかしむかし、人參さんと牛蒡さんと大根さんといだった。

ところが三人とも同じ色しかった。んで、あるときお湯立てだ。ほして、

「まずお湯さ入らっしゃい」

て言^やつで、一番最初、人參さんが入っと思つたら、熱い。熱いげんど我慢して入って、お湯から上がってみたれば、真赤えなつてしまった。はいつ見つだ牛蒡さんが、

「いやいや、あだえ赤くなっこんだらば、おれは……」

て、入ったふりしてはあ、すうっと上がって来た。んだから洗わねがら、まっ

くろだ。

こんど、大根さんが、はいつ見っただけあ、

「いや、お湯あついごんだら、なにもお湯うめて入ったらええっだな」

て、うめてゆつくり入って、ゆつくり洗ったほで、体中真白くなたつたて。んだからほのお湯さ入ってから、人参が赤くなつて、牛蒡が黒くなつて、大根が白くなつただけど。どんぴんからりん、すつからりん。

18 小僧持念 — 貸し便所 —

516

むかしむかし、ならげ榎下の宿さ、福聚寺というお寺さまあつて、ほこさ持念さんていう、とても賢い小僧さんがいだった。ところがほの小僧さんも、だんだえ大きくなつて、嫁さんもらつて、夫婦暮しした。ほんで人さいろいろ親切して、何してるもんだから、なかなかお金にめぐまんねがつた。

んで、あるとき、一策をめぐらした。いわゆるこの八月のお祭りのどき、貸し

便所建てることを考えた。た。ほして、杭木くいきと細木とムシロと背負つて、パツカリパツカリ上山さ降おつて行つた。ほしてお八幡さまの、八月のお祭りんどき、境内の脇さ、便所の小屋掛けした。ほして、《貸し便所》と大きく書いて立てつた。

ところが、はいつ見つだ町の人が、ほだな杭木や細木でなく、角もので板張りの便所建てはじめた。ほうしたところが、持念さんの方さ、誰一人来ねで、ほの立派な貸し便所の方さばかり行つてしまう。ほうしたけあ、何考えつだか、ほの持念さんが、三文の銭持たがつたけあ、すつと居ねぐなつた。居ねぐなつたけあ、間もなく川の流れ變つたみたいに、持念さんの方の便所さ、のとのと、のとのと人來た。ほしてほの奥さんが、

「何だべ、こたえいそがしくて銭とてりすんなねとき、なして、おら家のとうちやんが、どこさ行つたべ。どさ行つたもんだか、まず、はあ。お祭り見行つたもんだが、来ねつだ、こりや。おればっかりいそがしいごど、いそがしいごど」

なて、つぶやきながら、銭とりしつた。ほうしたけあ、夕方なつたれば、パツカパツカ來た。

「なんだべ、とうちゃんたら、おれぱり急がしくて、ししやます(大変だ)した。どさ行つて来たごど」

ていうたらば、

「いままで臭いとこえ頑張つて来た」

ていうたけど。ということは、持念さんが新しい便所さ入って、出て来ねがつたんだど。

んだから、他人^{ひと}入んべと思つて行ぐど、人いるもんだから、なんとも仕様なくて、ええ便所さ行がんねくて、持念さんが向うさ入っているもんだから、こつちの方さ、流れ変つたように、どんどん入ったなだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

19 四十八枚の田

517

むかしむかし、ある田舎の方に、とても数多く田あつどこあつたつて。段々畑みたいに段々の田で、一反歩四十八枚あつた。

昔は一反歩畝うのが一丁前であつたので、ほこに奉公に行つた者は四十八枚うなわんなねがつた。はいつ畝わねど、一丁前の給料もらわんなねがつた。ほして前の人からの申し送りになつていで、そこさ田うない行つたときには、へミヌさワラジ結つけておかんなねぞはあていうた。なしてと言うど、「暗くなつから」てよ。

ほして、ある人が行つて、一生けんめい、朝げから、せつせ、せつせとうなつた。四十六枚うなつたれば、田なくなつたはあ。やがては日もとつぷり暮れそうになつてきた。

「へえ、四十八枚うなえて言^やつた。あとどこにあんべ」

て、なんぼ探してもない。

「探してもないから、行^いんかはあなあ」

と思つて、ミヌ着つたれば、ミヌの下に二枚あつけど。どんびんからりん、すつからりん。

20 五反田の由来

518

むかしむかし、徳川三代將軍の家光公が、

「田ていうな、数ばりあつたて、米採れるもんでない。大きくするに越したことない。一反歩田作れ」

て、一反歩の田作つてみた。これあなかなか調子ええあんばいだった。次は三反歩、次は五反歩ていうな作つた。ほして、いよいよ一町歩の田作る。三千刈。

三千刈の田作つてみたれば、こんどは、こつちの方でそよ風みたいなのが、向うさ行ぐど大浪になつて、田植えた後なの、浮き苗なのばり出て、何とも仕様ない。ほして、

「ほんでは半分にすんべ」

ていうて、仕切つて五反歩の田にした。ほしたれば、ようやく大浪も立たねくて、調子ええなあていうわけで、五反歩の田出来たどこ、今でも江戸にはへ五反田ていうている。んだから、馬鹿に大きい一町歩ないう田作つても仕様ないもんだなあていうわけで、江戸には五反歩より大きい田、なかったって。どんぴんからりん、すっからりん。

21 又右衛門の天昇り

519

むかし、ある村に、又右エ門というすこぶる従順な若い衆いだっけど。ほして旦那のいうことは、何でも聞いて、ほして、「又右エ門、又右エ門」て、みんな可愛がらつていたけど。

あるとき、又右エ門が、唐傘売つて来いて言^やつた。「はい」ていうわけで唐傘売りに行つたれば、急に風吹いてきて、飛ばされそうになったもんだから、唐傘さ持^たぐ

ついているうち、みるみるうちはあ、天まで吹き上げらつてしまった。

ほして天まで吹き上げらつてしまったのはあ。ほして天さ行つたれば、倉なの建つていだつて。ほこでやっぱり臍へその煮付御馳走になつてはあ、お空で暮しつた。

又右エ門の村でも、毎年毎年、干魃でひどい目あつた。ほして、又右エ門の仕事は何だかていうと、ジョロで水撒き、雨降らせ方だつた。

「おら方の村、いつでも干魃でひどいがつたがら、おら方の村さ、余計降らせて呉つかなあ」

て、親切ごころに又右エ門は毎日毎日、自分の村さ雨降らせつた。

ところがある日、臍の煮付け食うの忘せつた。浮力がつかねぐつたもんだから、地上さ、足、つっぱずして落つてしまった。落ちる落ちると、どき行くべと思つたら、海ばたさジャボンと落つてしまった。ほうしたれば、何だか網みたいなさ引掛つて、ほして陸さ上げらつた。

「あつ、又右エ門だ。又右エ門だ」

て、村の人だつて。

「何だ、又右エ門、お前、どき行っていだんだ。唐傘売りに行ったけあ、いねぐなつたて聞いっだ。他の人の噂では天さ上ぼつたべていう話もあつたげんど」

ほしたら、又右エ門、話した。

「こいうわけで、おれあ天さ行つて、毎日雨降らせ方手伝わせらつだげんども、おら方の村、毎年干魃だから、おら方の村さ余計降らせて呉^けんなねべと思つて」

「お前か、毎日降らせたなて、おら方は毎日雨で、洪水ではあ、田畑流さつて百姓さんねくて、漁師になつたんだはあ。まずまずお前帰つてきて、ええがったなあ」
ていうて、まず村さ帰つて一緒になつたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

昔話における「語り」の系譜

— 瞽女・祭文・僧侶 —

武田 正

(1) はじめに

昔話は「語り」の文芸である。その「語り」がどのような条件のもとで継承されて来たかは、なおいくつかの問題を残している。昔話の伝承・伝播の形態を大別して、(1)家系伝承、(2)村落伝承、(3)職業人の伝承に分類することができる。水沢謙一氏によれば、①家のムカシガタリから聞いたものの、②村のムカシガタリから聞いたものの、③旅のムカシガタリから聞いたものということになる。そしてその「語り」が年齢に応じて「動物昔話」から「本格昔話」へ、さらに「笑話」から「世間話」へと、年齢を追って語られ、さらに家系伝承、村落伝承、職業人の

伝承と、昔話の話型も「語りぶり」も重なり合うことになる。

家系伝承における、家刀自の果たした役割は、すでに野村純一氏の「最初に語る昔話」及びその実証的調査報告ともいうべき『吹谷松兵衛昔話集』『萩野才兵衛昔話集』『関沢幸右衛門昔話集』『五分次郎』などに見られ、それを裏付けるように、水沢氏の諸著書がすでにあつたともいえる。「動物昔話」「本格昔話」のすぐれた語り手に、女性の多いこと、全体としてきめ細かに、伝承され、伝承を忠実に語ってくれることで聞き手に深い感銘を呼び起こし、語り手を育てて来たといつてよいのではなからうか。したがって、「動物昔話」をモチーフに分解してみると、単系のものが多く、モチーフの面白さ、ストーリーの面白さというものはほとんど見られない。にもかかわらず、動物昔話のひろがりは広く、ほとんど全国的に、しかもほとんど変化のないモチーフで見られる点を考えれば、これは「語り」によつて支えられている昔話であると言わざるを得ない。男の場合は家の中から世間に出て行かざるを得ない場合が多く、またどうしても世間と接触を持たざるを得なかったから、自然、語り手から話し手に変らざるを得なかったであろう。

臼田甚五郎博士は「民話の生誕・伝承」（「解釈と鑑賞」一九七五・二所収）で、北小浦部落における「家号を成す人名に必ず綽名がつき、その綽名ごとに由来する話がついてゐる」という指摘なども、昔話の生誕・伝承と深いかかわりを見せてくれることの一つである。山形県内に見られる「木小屋話」は若衆の語りの場であつたが、稲田浩二、福田晃氏の「蒜山盆地の昔話」などは地域全体としての語り手と話し手の交錯した昔話の存在を示してくれている。一方では囲炉裏端を出た昔話と、他方では職業人が他地方から持ち込んでくれる昔話が、「盆地の南端を大山への街道が走っている。その街道筋の郷原宿には、かつては大山の牛市へ急ぐ博労たちを留めた旅籠屋が軒を並べていたが、また多くの塗師たちが店を開いていた頃は、木地師や洪売り、漆売りなども盛んに出入りしていた」蒜山盆地での伝承の必然的形態であつたのだろう。同じことは、五百余話の昔話、世間話を伝承している上山市檜下の佐藤家の昔話についても言えることである。宿場町であると同時に、家系としての御伽衆か咄衆といった独自性、そして部落の行事としての「ほらふき会」、若衆の集まり場所であつた「藁仕事小屋」の存在が昔話

の多様性と共に、伝承管理の話数をふやしたものといえるが、それが今日まで語りつがれてきたことの意味を考えると、その昔話の聞き手の存在を無視するわけにはいかない。

かつてすぐれた聞き手であった者が、後にすぐれた語り手になったであろうことは、すでに多くの先学の指摘しているところであるが、そのすぐれた語り手を支えるためにさらに多くの聞き手が必要としたものであろう。聞き手が聞きたがる下地は、すでにいくつかの昔話を聞き、さらにより多く聞きたいと願うところにあつたから、旅の者の来訪は絶好の機会になったといえる。旅の者が他国で得た昔話、あるいは職業上身につけた昔話、世間話は、部落に訪れた時の聞き手の置かれていた状況と、語り手としての旅の者の持つ昔話、語りの座の条件によって、相当大的な食いちがいを持つことになるということは想像にかたくない。従来、職業人の語り手が「木尻話」とか、縁先での「笑話」という形でのみ把握されて来たのは、必ずしも正当でないのではなからうか。そのような観点から一、二掘り下げてみようというのが、小論の意図するところである。

(2) 遊芸人と昔話の「語り」

山形県南部において、他地域からの来訪者として見られたのは、次のような人々である。

- (1) 遊芸人としての越後瞽女、祭文語り、説教語り。
- (2) 行者としての朝日行者、出羽三山行者。地元の飯豊修験。
- (3) 商人としての魚売り、筋子売り、箕売り、笠売り、毒消し売り。
- (4) 職人としての大工、屋根葺き、塗師。
- (5) 仏寺に人を集めて説教をきかせた僧侶。

〈瞽女の語り〉

これらの人たちの中で、昔話の伝播に大きな役割を果たしたと思われる者は何といても越後瞽女、祭文語りのような遊芸人であろう。

杉本キクエ瞽女の語った『瞽女の語る昔話』（岩瀬博編著、三弥井書店）の中で

杉本媼の語り口を、岩瀬氏は「媼の語り口の特徴は、なかんずく会話文にある。登場人物の声色を使いわけ、喜怒哀楽は音色によって表現される。勇者は勇者らしく粗野な言葉で力強く、病人は病人らしく弱々しく」と言いながら、「昔話の語り口と言うよりも、講談、説教の語り口に近い」という、瞽女の語り口の特徴を指摘する。また彼女が誰から昔話を聞いたかを見れば他の瞽女から聞いたものが圧倒的であった。そしてそれ以上に興味のあることは、杉本媼が「旅先で昔話をした記憶を持たない」ということであろう。そしてまた瞽女が世間話をしないということを瞽女的美徳と考えてもいた。

だが、水沢謙一氏の『瞽女のごめんなんしよ昔』（講談社）によれば、「ゴゼ宿で、宿の子どもに昔話を語ったり、さらに、ゴゼウタの合間にも、村人に昔話を語ったゴゼもいた」ことの指摘がある。そして瞽女から聞いた昔話として、下條登美さんは「お糠とお米」をはじめ六話、池田セチさんは「天道かねのくさり」など三話、佐藤勇吉さんは「白い椿の下のかながめ」など四話。山岸光代さんは四話、佐藤セツさん八話、吉岡ヨシさん三話、山田ヤイ子さん八話、阿部ユキイ

さん五話、増井ナカさん一話、川上ユリさん一話、高橋ナオさん一話を収録して全部で四十四話の「ゴゼから聞いた昔話」は、瞽女が伝承、伝播に大きい役割を果たしていたことの証左に他ならない。

山形県置賜地方でも、瞽女宿で法事とか不幸があるのを知らずに來た瞽女は、その晩は「くどき」をせず、お経を上げたり、あるいは世間話などをしてその家族をなぐさめたりしたものであり、時には子どもたちを相手に昔話などを語って聞かせることがあったという。もちろん、昔話の「語り」は瞽女の職業ではなかったから、普段に語ることはなく、その宿の若衆や子どもがいるときには、宿を引き上げるときに、お礼の意味を込めて、軽い笑話や短かい昔話を語ってきかせることはあったのであろう。「杉本キクエ唄の性格として、若い衆相手の笑話、艶色譚なぞ許せないものであったと思われる」という指摘は、杉本唄の瞽女の師匠としての厳しい職業観を伺わせるものであっても、一般の瞽女や、まして「はなれゴゼ」などに当てはまるものではなかったようである。山形県白鷹町の語り手である工藤六兵衛翁の記憶によれば、「短いもの」や「艶話」を残して行ったものだ

というし、前記の『贅女の語る昔話』『贅女のごめんなんしよ昔』ともに動物昔話、本格昔話が圧倒的であり、それがまた格調高い語りになっている。しかし「笑話」や「世間話」がなかったのではなく、長岡贅女について、「亡きお菊さんと呼ばれたゴゼは、とりわけ昔話の語りの名人で、ゴゼ宿では、ゴゼウタよりも、昔話を語れと大人に所望されて語った」というから、「笑話」「世間話」系の昔話を披露したのであることは想像できよう。

〈祭文語りの昔話〉

祭文語りも贅女と同様、部落を歩き廻ったが、祭礼の出しものとして招ばれたり、あるいは部落の祭礼に合わせて来訪するものだったが、宿はやはり部落の中で決まっていた。祭文は男の職業であり、普段に一人旅をしていたということもあり、「祭文」の後には世間話、笑話などかなり自由に語っていた。工藤六兵衛翁の記憶では「嫁の歯」「握屁の命」「黒田節」などの世間話や笑話を好んでいたようである。

また酒田方面から秋田県の海岸部には今なお多くの「早物語」が残され、新潟県の新発田地方にも早物語が見られる。その伝承者はもっぱら祭文語りで、酒田秋田のものは、山形県の内陸部の祭文語りが伝えたものという。早物語が特に低俗なる芸人や、初心の盲の語りものであったということから考え合わせてみると、世間話、笑話などが芸の一つとして、祭文語りに、本格的な「祭文」の前座として語られたであろうことは、たぶん想像できる。

(3) 山伏、僧侶の昔話

遊芸人としての瞽女、祭文語りに対して、山形県内では山伏、行者も昔話伝播に一役かったと見ることが出来る。各地を霞場としている出羽三山の山伏は秋になると霞場に行き、次の年に三山詣りをする十五才の男子の登山の導者として家々を祈祷しに廻る。彼らにも部落で決めた宿があり、そこを根城にして各家を

廻ることになっていた。また朝日山には朝日行者、飯豊山には飯豊修験がおった。

「山伏と狐」の昔話は、彼ら山伏が登場するもので、それを山伏自身が語ったという例を白鷹町、朝日町に見ることができる。西川町の砂子関では法印をやっていた家柄の工藤嘉内氏が父から聞いた昔話を語ってくれた。また山伏一家の悲劇である継子譚を記した「古実今物語」を修験が書き残してくれたという工藤家に伝わる説話本がある。朝日行者であつたという。

九州における盲僧と昔話の伝播について、宮地武彦氏が「座頭が訪れ、〈平家くずれ〉〈島原くずれ〉〈安珍清姫〉などを語った」と指摘し、しかも〈島原くずれ〉とは「蛇女房」であるということを示している。本来の盲僧は天台宗玄清法流の別格本山、成就院に属するもので、荒神祓いをすることを職としているものであつたが、〈平家くずれ〉をも語り、盲僧を一名「琵琶語いさん」と呼ぶことからも、東北における瞽女と山伏の中間的な立場にあつたと見ることができそうである。笑話が、盲僧の場合、好まれて語られたということから見れば、昔話の「語り」をも、一種の芸能として見ていたであろうことは明白である。

仏教が部落の人々の支えになっていたことは、神社以上であつたといえる。それは明治以前の寺社奉行支配の時代にまで遡るまでもなく、葬式仏教としての性格をもった寺院であつたから、部落あるいは村の中心でもあり、地域によつては部落の集会所であり、春、秋の彼岸をはじめ部落の全体としての社交の場でもあつた。したがつて山間部の小部落においては、若衆の集まりや、百物語の場になつた例もあり、遊芸の場に使われた例もあつた。そして寺の僧侶自ら、念仏講、お日待などを主催したことも多い。従つて教化のために説教を語ることもあり、本山の僧侶を高座に迎えて説教をやつてもらうこともあつた。特に浄土真宗の寺での「節談説教」は安楽庵策伝の『醒睡笑』によつて見るとおり、説教というより笑話、落語に近いものを題材にしての「語り」であつたといつてよい。二月の涅槃会の地獄、極樂の軸絵などはそのまま寺と庶民の心のむすびつきを示すものであつた。

米沢市の斎藤捷太郎氏は「牡丹と唐獅子」「鷹ときじ」の二話を法話として寺で聞いたと記憶しているし、部落の人々がこの「説教」をこころ待ちしていたもの

だと語っている。（『まま子いじめ 米沢市宮井・六郷の昔話』）。また工藤六兵衛翁の昔話集『とーびんと』には「お釈迦さま」はじめ三五話の法話がのせられているし、清野久雄の御教示では、山形県松山町の菅原園さんの語る「石に咲いたバラ」が法話であったという（『山形の民話』24号所収）。

さらに山形県村山市白鳥の農家で「最初に語る昔話」は親鸞の事蹟で、それを聞く際は板の間に、年齢順に正座をして聞いたもので、その後足をくずして炬燵に入って昔話を聞いたという。

こうして見てくると、僧侶が昔話の伝播に果たした役割は、昔話の内容が一種独特のものであったにせよ、「語り」そのものに与えた影響力は極めて大きかったと推測できる。

(4) ま と め

昔話における「語り」はいろいろの機会を通して磨かれてきた。もちろん「語り」を磨くということは、聞き手の所在を前提とするものであったが、語り手自身が聞き手であったということが最初の問題であった。「語り」を磨くには、語り手自身の資質もさることながら、外的条件をたくみに自己の「語り」の中に加えて、自己の「語り」を作って行つたということに他ならない。山形県飯豊町大平部落での老婆たちは、仕事として孫へ「語り」をしてやつたから、彼女らは寄ると触ると、新しい昔話の種子を仕入れ、相互に披露し合い、話数をふやしたという。従つて瞽女、祭文語りの持つてくるそれにも目を光らせていた。

遊芸の徒であつた瞽女、祭文語りなどの「くどき」「講談風の語り」は、語りの職人でもあつたから、比較的近いところで、自分の「語り」の中に組み入れることが可能だつたのではなからうか。ただし、一部「語り」から「ハナシ」への傾斜もまたいなめない事実であつたろう。この点、盲僧などの半芸能的性格は、瞽

女、祭文語りとどう違うのかは興味のあるところである。

僧侶については、浄土真宗における高座よりする「節談説教」と共に、他宗派における「法話」の、昔話の「語り」への影響については見るべきものがあると言えるが、十分資料をもとにして今後追求して行く必要がある。（S 51・11・2）

かみなが姫

佐藤家の昔話（十二）

昭和五十一年十一月十日 発行

編者 武田 正

南陽市赤湯三一八〇の四

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

かみなが姫 佐藤家の昔話(十二)

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十三年十二月二十日

東北文教大学短期大学部民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

東北文教大学・同短期大学部附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

- 『西川町の昔話』(一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『むかしあったけど』(一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『米沢市築沢の昔話』(一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『米沢市塩井の昔話』(一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『安楽城の伝承(一)』(一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『安楽城の伝承(二)』(一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊)
- 『安楽城の伝承(三)』(一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊)
- 『高畠町和田の昔話』(一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
- 『及位の昔話(一)』(一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
- 『及位の昔話(四)』(一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊)
- 『及位の昔話(五)』(一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊)
- 『佐兵ばなし』(一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話(一)』(一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『お婆の手ん箱(一) 阿部キヌオさんの語り』(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』(一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(一) 民話のこころ(対談) 浜田広介先生と海老名ちやうさん』

(一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(二) 海老名ちやう昔話補遺』

(一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『たかみねと秋田の昔話』(一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『佐藤家の昔話(一) 山形県上山市檜下』(一九七二年七月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鳥吞爺 佐藤家の昔話(二)』(一九七二年九月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鉢かつぎ姫 佐藤家の昔話(三)』(一九七二年十二月発行、二〇一〇年七月再刊)

『天とひばり 佐藤家の昔話(四)』(一九七三年三月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『へらへら話 佐藤家の昔話(五)』(一九七三年七月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『夢のほたる 佐藤家の昔話(六)』(一九七三年十一月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『ぬるくす男 佐藤家の昔話(七)』(一九七四年十月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『蛤姫(上)(下) 佐藤家の昔話(八)』(一九七五年四月発行、二〇一一年七月再刊)

『おとぎり草 佐藤家の昔話(九)』(一九七五年七月発行、二〇一一年七月再刊)

『ゆき女 佐藤家の昔話(十)』(一九七六年二月発行、二〇一一年七月再刊)

『ねずみの角力とり 佐藤家の昔話(十一)』(一九七六年七月発行、二〇一一年十二月再刊)

『かみなが姫 佐藤家の昔話(十二)』(一九七六年十一月発行、二〇一一年十二月再刊)

『山鳥むかし 佐藤家の昔話(十三)』(一九七七年九月発行、二〇一一年十二月再刊)

『和尚と天狗 佐藤家の昔話(十四)』(一九七八年八月発行、二〇一一年十二月再刊)

『竜宮童子 佐藤家の昔話（十五）』（一九八〇年一月発行、二〇一一年十二月再刊）

